



地域で

子どもたちを 育もう!



Kids

子どもが自分らしさを出せる場所

「プレーパーク」の取り組み

「プレーパーク」（冒険遊

場、プレイパークなど）とい

う子どもたちの遊び場をご存

知だろうか。子どもたちが遊

びの中で、挑戦をし、失敗を

繰り返して体験しながら、自分

で育つ力を身に付け、協力す

る力を身に付けていくことを願った「子どもの遊

び場」である。現在、全国に230か所以上ある

という（2009年4月現在）。このプレーパー

クの中から、東京都世田谷の羽根木プレーパーク

（NPO法人プレーパークせたがや運営）と静岡

県富士市の冒険遊び場たごっこパーク（NPO法

人ゆめ・まち・なっと運営）、埼玉県越谷市の「越

谷にプレーパークをつくる会」を取材し、その魅

力を探ってみた。

（取材・文／三浦 友芽）



プレーパークは、

地域住民主体の団

体が運営し、行政

の補助金や寄付、

会費等で成り立っ

ているところが多

いようだ。活動場

所は地域で異なり、

「羽根木」は公園内に常設で、「たごっこ」や「越

谷」は市内の公園で1か月に数回実施している。

子どもたちは、好きな時間に集まってくるが、友

だちと遊ぶだけでなく、一緒に遊んでいる。遊び

ともすぐに仲間になり、一緒に遊んでいる。遊び

の内容は、廃材を利用した木工遊び、ボール遊び、

火をおこしてべっこう飴を作るなど多岐にわたる

が、大人が決めた遊びはない。子どもたちは一人

ひとり、さまざまな背景を持つが、ここではみんな



傘布をかぶって、雨も何のその



羽根木プレーパークの看板



な同じ。公園内を駆け回ったり、大声を出してはしゃいだりして、伸び伸びと遊んでいる。子どもが遊びの中から生み出す創造力や行動力は、大人の想像をはるかに超えている。

「たごっこ」取材の日は雨。子どもたちは外へ飛び出し、びしょ濡れになっていく。持ってきた傘を分解し、傘布をかぶって遊んでいる子、雨の中でキャッチボールを始める子たちもいる。子どもたちの「自由に遊び

たい」という気持ちは、どんな悪条件も吹き飛ばしてしまう。「雨だから外で遊ぶのは止めよう」と言わないのがプレーパークだ。保護者には最初に興味を十分に理解してもらい、参加をお願いするところ、自由という所とあるようだ。

「羽根木」の入り口の看板には「子どもが公園で自由に遊ぶためには『事故は自分の責任』という考えが根本です」と書いてある。「越谷」では、1本の木に数人が登って高さを競ったり、わざと

揺らして相手を驚かせたりしていた。こういう場面でも大人は見守りに徹している。コーディネーターの渚野彩子さんは「自ら危険を体験して学んでほしい」と言う。

また、「自分の責任」とは、何も危険を学ぶだけではない。「羽根木」元世話人代表の福島智子さんは「今は子どもの成績のことだけを思っている親が多いが、子ども時代にしかできないことをやることで子どもは地に足がついた状態で育ち、自信を持てるようになる。自己肯定感を持てる子どもなら、将来どんな道を選んでも大丈夫だと思う」と言う。NPO法人ゆめ・まち・ねつとの渡部達也代表も「3日間住んだ秘密基地を完全撤収していく子、土砂降りの中、片付けを手伝う子、常連になるとみんな自然にそんなことをしてくれます」と話す。

子どもの「やりたい」気持ちを大切にすること、子ども同士で成長していく。私たちは、つまりながら成長する子どもたちを、焦らずに見守っていききたいものである。

